

## 社会倫理研究所NEWSLETTER

# 社会倫理研究所ニューズレター

第11号 | 2005年3月・4月

■CONTENTS | 社倫研ニュース | 懇話会オンライン | 懇話会報告 | 【不定期連載】 あんな本・こんな本 |

## 社倫研ニュース

---

2005年4月1日よりスタッフの異動があり、澤木勝茂(数理情報学部教授)が南山大学社会倫理研究所の新しい所長(第二種研究所員)となりました。また、杉原桂太講師(数理情報学部)が第二種研究所員として、小林傳司教授(大阪大学コミュニケーションデザインセンター)、山田哲也助教授(椋山女学園大学現代マネジメント学部)が非常勤研究員として、新たに研究所の活動に協力して下さることになりました。突然の所長交代というアクシデントはありましたが、研究所の活動の基本方針に変更はありません。目下、山田、シーゲル、奥田の第一種研究所員3名がそれぞれのプロジェクトを計画し準備作業に入っているところであり、先行して実行中のシーゲル所員のプロジェクトでは、一連の懇話会を経て、本年9月にワークショップを開催する予定です。今後ともご指導ご支援賜りますようお願い申し上げます。

また、愛・地球博パートナーシップ事業として行われる南山大学「人間の尊厳科目開講10周年記念・連続講演会」にて、社倫研からは、第一種研究所員の奥田太郎、マイケル・シーゲル、第二種研究所員の丸山雅夫、中矢俊博が講演致します。

## 懇話会オンライン

---

今回は、椋山女学園大学現代マネジメント学部の山田哲也先生のご講演「[21世紀の国際社会と国連：武力行使を巡る問題を中心として](#)」をお届けいたします。

## 懇話会報告

---

去る2005年1月17日(月)、南山大学J棟1階特別合同研究室にて、本年度第5回懇話会が開催されました。講師に日本国際問題研究所の中山俊宏先生をお招きして、「アメリカが保守化した背景およびその外交的インプリケーション」というタイトルでご講演をいただきました。

中山先生はまず、アメリカにおける保守の特殊性について、回帰すべき「過去」のない国における保守であり、それゆえに革新的保守という矛盾を抱えている、と説明します。また、アメリカにおける保守主義は一枚岩ではなく、保守主義のたどってきた大きな物語と記憶の共有によって統一性を維持する思想運動として捉えられる必要がある、と述べます。さらに、アメリカの保守主義は、リベラル・エスタブリッシュメントが支配する「アカデミック」とは区別される「インテレクチュアル」として、政治・社会におけるディスコースを変える方向で動いてきたことが指摘されました。そして、1950年代のリベラル派は、保守主義を「一時的な逸脱現象」として解釈したが、保守主義はひとつの思想潮流として独自のあり方をなすものであり、そのように正しく理解されるべきだ、と中山先生は主張します。



こうした導入の後、1950年代から現在に至るまでの保守主義をめぐる歴史的経緯が説明されました。アメリカの保守主義には、反共主義、リバタリアニズム、伝統主義という3つの潮流があり、1950年代において、それらが分裂と統合を繰り返しながら、徐々に保守主義のコアが形成されていく過程が説明されました。また、1960年代において、公民権運動に象徴される60年代とは別の、ゴールドウォーターにはじまる60年代があったことが指摘され、YAFやACUなどの組織の活動により、保守主義開花のインフラが構築されていったと説明されます。そして、1970年代には、保守主義は、アイディア・インダストリーとして自らの研究成果を政策に反映させていくためのネットワーク、人材、戦略を整えるに至り、共和党の保守党化が進んでいくこととなります。そして、2004年、明示的に保守的政策を掲げて当選した初の大統領が誕生することとなります。今後、ブッシュ政権は、2008年に向けて、「パーマネント・リパブリカン・マジョリティ」に向けた戦略に出るだろう、と予想されます。これに対して民主党は、対抗できるだけの政治的な主張を組み立てられずにいる、と中山先生は指摘しました。

こうして歴史的経緯が述べられた後、保守化の外交的インプリケーションについて述べられました。保守派は、外交姿勢についても一枚岩ではなく、アイソレーションイズム、ナショナリズム、ネオ・コンサーヴァティズムといった相矛盾する諸派が含まれており、それらは国連不信を共通項としてまとまっているのが現状である、と指摘されます。それゆえ、ユニラテラリズムにも多様な意味合いがあることとなります。

最後に、第二期ブッシュ政権の外交・安全保障政策について、ダメージ・コントロール・モードに入るであろうという予想が提示され、現在日本にも見られる「軽い反米」

最後に、第二期ブッシュ政権の外交・安全保障政策について、ダメージ・コントロール・モードに入るであろうという予想が提示され、現在日本にも見られる「軽い反米」

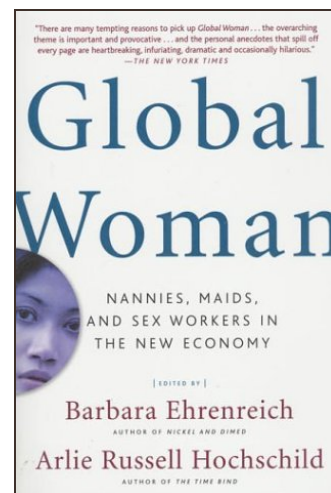
ナショナリズムが政治的回路に流れ込んだときに日米関係にしこりができるかもしれないと指摘されました。(文責 | 奥田)

## 【不定期連載】

### こんな本・あんな本 第10回

**Barbara Ehrenreich & Arlie Russell Hochschild eds., *Global Woman: Nannies, Maids, and Sex Workers in the New Economy*, New York: Henry Holt and Company, 2002.**

「グローバル・ウーマン」という言葉を聞いて、あなたはどんな女性を想像するだろう？例えば、華麗なキャリアを引っ提げて世界を又ぎに掛けるエグゼクティブの女性だろうか？グローバル化と「女性革命」はもちろん、そのような女性を増加させたにちがいない。しかし、本書で論じられている「グローバル・ウーマン」とは、グローバル化と「女性革命」の進行によって生まれた、別のタイプの女性たちのことである。すなわち、第一世界のキャリア・ウーマンたちがもはや担わなくなったケア労働—子どもや高齢者の世話・家事・セックス—を引き受けて、世界を移動する女性労働者たちである。



かつてその圧倒的多数を男性が占めていた世界の移民は、近年急激に変化し、今や半数が女性となっている。中には、アメリカ合衆国、カナダ、スウェーデン、イギリス、アルゼンチン、イスラエルのように、1990年代を通じて、男性移民よりも女性移民の方が多い国もある。女性移民の大多数は、メトロポリスの家庭でのケア労働に従事する。かつてこうしたケア労働に従事していた都市周辺地域や農村出身の女性が、近隣諸国からの女性移民に取って代われ、さらに現在では、遠く離れた第三世界諸国の女性移民が参入するという動きが、世界の各地で起こっているのである。

その背景にはもちろん、第一世界と第三世界の間大きな賃金格差が存在する。女性の就労の増加によって生じたケア労働需要を抱える第一世界側のニーズと、職や外貨獲得という第三世界側のニーズがマッチするという事情もある。セックス・ワークにおいてとりわけ顕著な、異人種・異民族を「天性のケア提供者」とみなす、ポストコロニアルな人種的・民族的偏見もあるだろう。加えて、移動主体の側の非経済的な事情も存在すると編者らは主張する。近年の女性移民の出身国での出身階層は必ずしも低くなく、むしろ比較的裕福で教育水準の高い女性移民が増加しているという。「女性革命」は、第三世界の女性たちを覚醒させ、グローバル化する世界の中で相対的に魅力を失いつつある、第三世界の男性による搾取からの逃避を、自立心旺盛な女性たちの間で促した。こうして、かつてはローカルであった社会的分業が、グローバルなものとなったのである。

本書には16本の論文が収められている。アメリカ合衆国のケア労働者について書かれたものが多いのは、本書が米国人によって編まれたというだけでなく、こうした「移民

の女性化」がもっとも顕著に生じている国だからであろう。アジア人として私が特に興味深く読んだのは、ヨメが育児支援を受ける一方で義理の親の老後のケアを期待されるという、伝統的なケアの連鎖に対抗して、フィリピン移民を雇ってヨメ役割を代行させる台湾女性の事例、および、第一世界であるアメリカ合衆国の結婚市場で不利な状態におかれている低賃金労働者のベトナム人男性と、その高学歴と高キャリアのために「負け犬」となった第三世界のベトナムの女性とが、それぞれの住む国の国際社会での相対的な地位の違いを背景とした国際結婚市場を通じて、結婚するという事例であった。本書で展開される、「女性革命」の見えない側面に光を当てる試み、グローバルな「移民の女性化」の問題をフェミニズムの視点から総合的にとらえる試みは、挑戦的で刺激的である。そしてその試みは、「女性革命」の華やかな側面にばかり目を向けがちな、フェミニズムへの批判とも受け取れる。

実際、編者の一人Ehrenreichは、「『家事の政治学』について語る者はもはや存在しないようであるが、それは家事を自分でやる社会学者がほとんどいなくなったからではないか」と論じている。第一世界の女性たちがケア労働を引き受けなくなったのと同時に、ケア労働についても語らなくなる。言論の世界でも、ケア労働について語るのはもっぱら第三世界の女性というような、グローバルな社会的分業が起こるのかも知れない。

しかしながら、ケア労働は依然として「女性の領域」のままである。ある女性がそれまでやっていたことを、世界のどこかの別の女性がやるようになった、というだけのことである。「女性の解放」とは、そんなことだったのだろうか？

日本でも近年「人身売買」が問題となり、セックス・ワークに従事する外国人労働者の規制が強化されつつある。セックス・ワーカーや農村のアジア人ヨメといった、既によく知られた問題だけでなく、育児・看護・介護への外国人労働者の導入といった問題も論じられている。国内で望ましい結婚相手を見つけられない女性たちに、国際結婚を斡旋する業者も存在する。「グローバル・ウーマン」は、日本にも生まれているのだ。

果たして日本のフェミニズムは今後も、ケア労働への関心を払い続けていくのであろうか。

(第10回担当 | 林 雅代、社会倫理研究所第二種研究員。専門：教育史、教育社会学)